

ありふれたチヨコレート2

## 第一章 マンハッタンの迷子

「Where am I?」（いじはあじこ）

うっかりそんな声を上げた茅乃<sup>かづの</sup>は、ただちに大後悔する羽目<sup>おち</sup>に陥<sup>おち</sup>った。その直後、周りを人に囲まれてしまったからだ。

茅乃よりも頭一つ分背の高い大学生風の二人組、二歳ぐらいの男の子を抱いた金髪碧眼<sup>きんぱつへきがん</sup>の若い女性、そしてアメリカンフード大好きです！と言わんばかりの体形の中年女性。その四人、いや子どもを含めて五人が、茅乃を中心に円陣を組んでいる。

しまった。考えるより先にしゃべれって言われすぎたせいで、本当に考えなしになっちゃったよ……

日本でお世話になっていた女性英語教師は、茅乃に繰り返し言い聞かせた。「考えちゃダメ！ とにかくしゃべりなさい。間違えるのが恥ずかしいからって黙り込むのは厳禁

よ！」

その言葉を聞いたたびに、確かにそのとおり、語学はある意味条件反射だと納得し、文法やら何やら小難しいことは一切考えず、知っている単語を羅列することに専念した。

渡米を決めて以降、四六時中なんでもかんでも片っ端から英語にする訓練をしていたせいで、先ほども頭に浮かんだ困惑をそのまま声にしてしまったのだ。あまりにも馬鹿すぎるぞ茅乃、である。

『なんだ、迷子か？』

『どこに行きたいの？ 言つてごらんさい』

『駅か？ 美術館か？ それともブロードウェイか？』

『心配するな、リトルレディ。俺たちに任せとけ！』

茅乃はちよつとむつとして、最後の台詞を言った学生風の二人を見る。

リトルレディって、私は君らよりかなり年上だぞ……たぶん。

でも身長だけを比べれば、彼らより遥かにリトル……いや、待てよ、リトルとスモールってどう違うんだっけ？ あーもうわけわかんない。いいからほつといて〜。

とはいえ、彼らが善意から茅乃を助けようとしてくれていることはよくわかったし、茅乃が手にしていた地図を広げて、リトルレディの行きたい場所はここか？ と指さしてくれるのも大変ありがた。

がたい。

だが、毎度のことながら、茅乃には彼らの言う「任せとけ！」の具体的な内容がちつとも理解できない。

ああしろ、こうしろ、とアドバイスしてくれているようだが、とにかく早口でほとんど聞き取れないのだ。おたおたと、もつとゆつくり話して……と繰り返し頼んで、やっと半分理解できるかどうか。

道に迷ったときの英会話については、ガイドブックの巻末にも書いてあるけれど、それはあくまでも道に迷っています、助けてください、と頼む方法だけ。

答えを、マシンガンみたいなスピードで、しかもネイティブ表現で返されても、頭の周りを疑問符が飛び交うばかりだ。

これまでの多くの迷子経験によれば、彼らは最終的になんとか茅乃が行きたい場所を探り出し、身振り手振りに加えて「This street」「go」「straight」というような説明してくれる。もちろん、彼らはこんな間抜けな単語の羅列はしないけれど、茅乃にはそれぐらいしか聞き取れないのである。それでもことが民間レベルですめば御の字。

最悪なのは、彼らが茅乃のことをあまりにも危なっかしいと思ひ、保護が必要と判断された場合だ。

彼らは周囲をぐるりと見回し、通りかかった警察官に茅乃を引き渡そうとする。

善良なる市民を助けるのは警察官の職務の一つだが、なぜか茅乃がお世話になるのは同じ警察官

ばかり。

もしかしたらニューヨーク市警は、似たような姿形の警察官を五十人ぐらいこの地区に配置しており、茅乃がそれを識別できていないだけかもしれない。そう思い込もうとしてみたが、残念ながらどう考えてもその可能性は低い。

第一、遭遇するたびに「This is insane! It's you again!」(信じられない! またお前か!)と空を仰ぐのだから、きつと同じ人なのだろう。

日本では見慣れた黒い髪も、緑の目とセットになると印象がだいぶ違うなあ、などと考えながら、呆れた顔で首を振る警察官に最寄りの駅まで誘導されること、すでに三回。

我ながら、何でこんなことになってしまふのか理解しがたい。東京の鉄道路線図を全て頭に入れ、日本で一、二を争う複雑さと言われている名古屋の地下街ですら我が庭のように闊歩していた自分が、ニューヨークで迷子になりまくるなんて思いもしなかった。

同じ地球上、しかも同じ北半球。太陽が見える方向だって同じなのに、ここまで方向感覚が狂うなんてあり得ない! と叫んでも事実は事実。本日も茅乃は、親切的なニューヨーカーに助けられての帰宅とあいなった。

黒髪翠眼の警察官に会わずにすんだだけでもラッキーだったと思うほかなかった。

長年『瀬田係』という名の補佐役として自分をこき使ってきた上司、瀬田聡司と想いを通じ合わせた茅乃。すったもんだの末、ついにニューヨークで暮らす瀬田のもとに行き、彼が跡を継ぐ予定

になっている巨大企業SICに入ることを決めたのだが――

日本にいた間に語学学校に通い詰め、ビジネス英語についてもできる限りの習得に努めたものの所詮付け焼き刃。ニューヨークに向かう飛行機の中で、隣り合わせたアメリカ人カップルの会話はほとんど理解できなかった。あんなに勉強したんだから少しはわかるだろうと耳をそばだてていた茅乃は、落ち込むのを通り越して冷や汗が出してしまった。

日本にいたとき、瀬田がSICのスタッフと英語で話しているのを聞いたことがある。そのときは機関銃のような会話のスピードに、なんてせっかちな男だ、もうちょっとゆっくりしゃべれよ、と思ったものだが、アメリカ人カップルの会話を聞いてみれば、あのとときの瀬田の会話速度はごく標準。商談がエキサイトすればさらに加速することは十分予測できる。

しかも、カップルの会話には、英語の教科書に出てくる表現なんてほとんどなかった。本場の英会話は茅乃が学んだ教科書英語では太刀打ちできないものだった。

茅乃は、ニューヨークに着くなり、空港に迎えに来ていた瀬田に詰め寄った。

「聡司さん! ちょっと英語でしゃべってみてください!」

「なんだよ、久しぶりに会ったっていうのにいきなりそれかよ!」

「いいから! 日本からやってきたお客さんを空港で迎えるってシチュエーションでお願いします! 普通のアメリカ人が話す感じで!」

「How was the flight?」

「なんで Welcome to NY. I am glad to see you. じゃないんですか!？」

「そう言う奴がいけないわけじゃないが……。それじゃあ、中学校の教科書そのまんまだろう」

「ううう……。スピード以前の問題だった」

「というかな、普通のアメリカ人ならまずこうだ」

と言うなり、熱いハグとキスが降ってきたのには参った。確かに瀬田の言うとおり、普通のアメリカ人ならまずそれだろうが、あいにく二人とも日本人。

「だから日本人ですって、聡司さんも私も!!」

何度も言わせないでくれ、である。

真っ赤になった茅乃を笑いながら、瀬田は彼女のスーツケースを手にし、さっさと駐車場に向かった。

瀬田家御用達らしいハイヤーの運転手は、日本から来た女性客、しかも瀬田のフィアンセとあっては大歓迎するしかない、とばかりにあれこれ話しかけてくる。それがまたハイスピードかつスラングが含まれていてわからない言葉ばかり。これでは仕事以前に日常生活もままならない。

というわけで、茅乃は自ら望んで語学学校に入学することにしたのだった。

学生時代から英語は得意ではなかった。高校三年のときに受けた英検二級は、一次試験がマークシートで、勘で選んだ答えがごとく当たって何とか合格。二次の面接に至っては、教師に泣きついて特訓をもらったおかげで辛うじて合格できたようなものだ。TOEICなんて受けよう

と考えたことすらない。アメリカに住むと決めたものの、自分の英語能力では話にならないことは明白だったので、茅乃は不安でたまらなかった。瀬田にも「やっぱり本社で仕事をするなんて無理かも……」と何度も泣き言を言ったのだが、彼はまともに取り合ってくれなかった。

瀬田曰く、自分もそばにいるし、SIC専務室所属の貝谷は非常に英語に長けていて、茅乃の能力を超えた英語が必要となったら、彼がサポートしてくれるから大丈夫、ということらしい。

それでも茅乃は、一刻も早く瀬田や貝谷の手を煩わせずにすむようになりたかった。特に自分の英語が使い物にならないことを実感させられたあとでは、その気持ちはもはや焦燥に近かった。

茅乃がニューヨークに到着したのは二月三日。それから一週間後に結婚式を挙げ、新婚旅行から戻ってたちに語学学校に入学。本社での勤務が始まる四月一日までの一ヶ月半が茅乃に与えられた猶予だった。

朝の八時から昼までの四時間コースを週に五日。とにかく英語漬けになるしかないと覚悟して選んだコースだったけれど、ハイスピードで進んでいく授業は受けるだけで茅乃を消耗させる。

しかも予習や復習にかかる時間は膨大だし、クラスには日本人が一人もいなかったため、わからないところを訊ねることすらできない。それどころか、息抜きとなるはずのクラスメイトとの雑談ですら英語。彼らは至ってフレンドリーかつ頻繁に話しかけてきたため、休憩時間といえども頭を休めることなどできなかった。

おかげで授業が終わったあとの茅乃は疲労困憊。それでも長期休暇中の妻としては、夫に手料理

の一つも食べてもらいたいし、家の管理だってそれなりにやりたい。となると、食材や日用品の買入れが必要になり、授業を終えたばかりの疲れた頭であちこち歩き回って、あつという間に迷子の出来上がり、というわけである。

「まさかこんなところに障害があるうとは……」

会社から戻った瀬田は、今日も迷子になった、としよんぼりする茅乃に戸惑いを隠せなかった。一刻も早く英語を習得したいという茅乃の気持ちはわかっていたし、自分の留守中の時間を潰すためにも語学学校に入ることは大いに賛成だった。

家から学校までの道もそんなに複雑ではないはずだし、朝は自分が出社するついでに送っていくのだから、茅乃が一人で歩くのは帰り道だけ。そのぐらいなら大丈夫だと思っていたのだ。

なのにこんなに迷子になるなんて、まったくの想定外。いくら慣れない街といっても、さすがにこう連日では多すぎだった。

瀬田は、頻繁に迷子になつては落ち込んでいる茅乃が痛ましくなり、とうとう個人レッスンへの変更を提案した。それなら講師が家に来てくれるのだから迷子になりようがない。

だが茅乃は力なく首を振った。

「大丈夫です。やつと慣れてきたところだし、今までだってちゃんと戻つてくれました。ニューヨーカーつてすごく親切なんですね。それに、ジョージともすっかり顔なじみになっちゃったし」「ジョージ？」

聞き慣れない名前に、瀬田はちよつと眉をひそめる。茅乃はこれまた疲れた声で言った。

「いつもお世話になる巡查さんです。学校があるあたりが管轄みたいで、迷子になるたびにその人と出くわしちゃうんです。ネームプレートにジョージ・マケインって書いてありました」

「警官と顔なじみになるって状況がおかしいだろう。学校を替わりたくないなら、しばらく運転手を迎えるにやる」

「でも聡司さん、そんなことしていたらいつまで経つても街に慣れません。大丈夫ですよ、あと半月もしたらきつと迷わなくなります」

瀬田は、それまでにあつと何回ジョージとやらに出くわす気だ、と詰め寄りたくなる。

黒髪で緑色の目、ファミリーネームがマケイン、ときたらおそらく彼はアイルランド系だ。頑固だけれど親切で面倒見がいいのが特徴の警察官は、茅乃にはさぞかし頼もしく見えることだろう。

だが、困っている茅乃を颯爽と助ける男が自分じゃないなんて納得しがたい。

とはいえ、茅乃の言うことは至極もつとも。街に慣れるためには迷子にならなくなるまで街を歩き回るのが一番簡単である。

そもそも茅乃が自分のためだけに、運転手付きの車を回すなんてことを受け入れるわけがないのだ。彼女が毎朝、車に乗っていくのは、たまたま語学学校が瀬田の通勤途中にあるからにすぎない。そうでなければ彼女は、登校からして自力で行くと言いつつ出さるだろう。

結局、茅乃が大丈夫だと言う以上、それを信じて見守るしかなかった。

瀬田はそう自分に言い聞かせる一方で、別の不安に囚われる。  
みんな親切だと茅乃は言うけれど、彼女が自分に声をかけてきた相手の善悪を判断できるとは思えない。

平和な日本で生まれ育った茅乃は、警戒心がひどく希薄だ。酒やドラッグの影響を受けていたりして、見るからに危なそうな相手であれば警戒もするだろうが、質の悪い相手が親切を装って近づいてきたらわからないだろう。道を教えるふりをして油断させ、バッグを奪って逃走、あるいはナイフで刺す、なんてニューヨークではよく聞く話だった。  
彼女の独立独歩の精神を尊重すべきだという気持ちと、彼女が危険な目に遭わないようにつきっきりで守ってやりたいという気持ちがせめぎ合う。

けれど、瀬田は社長教育のまった中である。社長である父、瀬田雄介は早期の退任を望んでおり、瀬田はできるだけ早く引き継ぎを完了することを期待されていた。

茅乃の到着以後、結婚式やら新婚旅行やらで、半月近くともに仕事をしていた瀬田だが、そろそろ日常業務に戻らないと、茅乃に溜まりに溜まった自分の後始末から始めさせることになっ  
てしまう。

二十四時間そばにいて、茅乃の新生活をサポートしてやりたい。だがそれは今の瀬田には不可能だった。

茅乃には瀬田の心の動きが手に取るようにわかっていた。

瀬田は、自分が半ば強引に連れてきてしまったこの国で、茅乃が英語にも街にもなかなか慣れず苦戦していることが心苦しいのだろう。そばにいられないことを申し訳ないとすら思っているはずだ。

けれど茅乃にしてみれば、それも含めて自分で決めたことだ。どんな苦勞をしても瀬田と共に生きる、その道を選んだのは自分なのだ。だから、不安な気持ちを無理矢理蹴飛ばして、瀬田を安心させるように言った。

「そんな顔しないでください。本当に大丈夫ですから。英語も少しずつだけの上達してきましたし、ジョージに面倒をかけることもだんだん減るはずですよ。なんといつてもこの街は、だいぶ派手な札幌みたいなものですから馴染めないわけがありません」

『だいぶ派手な札幌』というのは我ながら言い得て妙だと思う。

三月とはいえ、まだ寒さが思いつきり残っているこの気候からして、学生時代を札幌で過ごした茅乃には懐かしい。

家族や友人たちは、こぞって「ニューヨークは寒いよ！」と脅したけれど、凍てつくハドソン川にしても、ひどく滑って歩きづらい道路にしても、あーそうそう、こんな感じだった……と小さな笑みが浮かぶほどだった。

冬のニューヨークにいきなりやってきて、気候にたじろがずにすむだけでも上等だ。他のことだって、だんだん大丈夫になっていくに決まっている。

あとちよつとの辛抱だ……茅乃は、自分にそう言い聞かせた。

「わかった。じゃあなるべく迷子になる回数を減らす方向で頑張ってくれ。それと、くれぐれも身の回りに気をつける。外出は昼間だけにしてくれよ。間違っても夜まで外にいるんじゃないぞ」

「了解です。気をつけます」

おどけて敬礼する茅乃を見つめる瀬田の眼差しは、依然として不安の色を湛えていた。

それ以降、茅乃は語学学校の帰りに寄り道することをやめた。その代わり一旦帰宅し、休憩したあとに買い物に出ることにした。

瀬田の心配はよくわかるし、迷子になったと告げたときの彼の表情は見ていて痛ましすぎた。

授業を終えたばかりの疲れ果てた頭で学校周辺をうろろして、わざわざ迷子になる必要はない。とりあえず、家の周りを完全に把握し、それから少しずつ行動範囲を広げていこうと考えたのだ。

二人が新居を構えたのは、アッパー・ウエスト・サイドにあるコンドミニアムだった。

日本で言うところの高級分譲マンションで、地下にはジムやプールもある。エントランスには常時ドアマンが立っているからセキュリティもかなり期待できた。

同じ通りにはサンドイッチや総菜を売るデリカテッセンが何軒もあるし、居心地の良さそうなカフェもある。目の前にはセントラル・パークが広がり、散歩や日光浴も楽しめた。

結婚後の住まいについてまったく聞かされていなかった茅乃は、東京で瀬田の両親と顔を合わせたと時の話から、彼の両親が住む家に同居するのだとばかり思っていた。

ところが、いざニューヨークに着いてみると、案内されたのは高層マンションの中ほどにある4

LDK。日本のマンションとは比べものにならないほど天井も高く、一部屋一部屋も広がったけれど、明らかに東京の彼の両親の家よりも狭かった。

不思議に思っただ瀬田に訊ねてみると、彼の母親が「ここよりずっと広い」と説明したのは、郊外にある一軒家のことだそうだった。ただし、瀬田の両親がその家で過ごすのは週末だけで、平日はアッパー・ウエスト・サイドにあるコンドミニアムで暮らしているという。

マンハッタンで働く人のうち、一部の裕福な人々は、そうやってウイークデーは都会で過ごし、週末や長期休暇になると郊外の家に戻って寛ぐのだと瀬田が教えてくれた。

瀬田の説明に頷きながらも、茅乃は疑問を隠せなかった。じゃあ、ここはいったい誰の家？ もしかして賃貸？ と思っていると当たり前みたいな顔で瀬田が言った。

「ここは俺が買った部屋だ」

茅乃は、住居費が高額なニューヨークで、瀬田親子が家を三軒も持っているという事実には唖然とした。

そのうえ、弟も持っているから都合四軒だな、と涼しい顔で言われるに至っては、返す言葉もなかった。

ともあれ、アッパー・ウエスト・サイドは超高級住宅街であるアッパー・イースト・サイドよりは庶民的だ、と説明されて茅乃はほっとした。確かに、来るときに見かけたレストランもブティックも、茅乃のような庶民でも受け入れてくれそうな雰囲気だった。

そのあと瀬田は、コンドミニアムとその周辺を案内してくれた。気に入ったか？ と訊かれ、茅



乃はにつこり笑って頷いた。

「確かに敷居は高そうですね、跨またげないほどじゃないみたいです」

「それはよかった。お前にはこのあたりのほうが向いていると思ったんだ。正解だったな」

「他にも選択肢があつたんですか？」

海外生活のガイドブックには、住宅難が著いちごしいマンハッタンで住まいを探すのは大変だと書いてあつた。何冊も読んでみたが、どのガイドにもそう書いてあつたのだから本当だろう。

いくらお金持ちでも、物件そのものがなければ借りることも買うこともできないはずなのに、と疑問を口にした茅乃に、瀬田は何でもないことのように答えた。

「かなり時間をかけて探した。で、二年ほど前に、親父たちの近所とところが同時に売りに出されたんだ。親父たちは、近所に買えと言つたんだが、お前は居心地が悪いだろうと思つてこつちにした」

「ちよつと待つてください。二年前つて！」

そのときはまだ、結婚はおろか、瀬田と付き合いたいと思つたこともなかった。自分の中に、瀬田を慕しよう気持ちがあることにすら気づいていなかったのだ。そんな頃に、彼ははずれ茅乃と住むことを前提にこのコンドミニアムを買つたというのか。

「先走りすぎです」

「結果オーライだろう。俺はお前を逃がすつもりなんかなかったんだから」

と瀬田はさも得意そうに言つた。

あまりにも余裕たつぷりの俺様ぶりが癪しやくに障り、心にもなく、全然オーライじゃないです、と反論してしまつた茅乃は、あつという間に寝室に連れ込まれ『オーライ』であることを認めるまで、あれこれされまくつてしまつた。油断も隙もないとはこの男のことだと思つた。

それでも、住み心地の良さそうなコンドミニアムで、二人きりの新婚生活を始められることが、茅乃はとても嬉しかつた。

ともあれ、地元優先作戦に切り替えたおかげで、とりあえずコンドミニアム周辺では迷子にならなくなつた。

よしよし、これで近場は大丈夫、と思つた茅乃は、少し足を伸ばしてみることにした。

二人のコンドミニアムは、ベッドルームを三つも備えている大きなものだったが、家具や備品は最低限しか入つていなかった。

瀬田は茅乃がニューヨークに来るまでは、仕事の引き継ぎの関係で両親と一緒に暮らしていたというから、こちらに足りないものが多いのも当然だろう。

必要なものは何でも買つていいし、模様替えしたければ好きにしろ、と瀬田から言われていた茅乃は、仕事が始まるまでにそちらも片付けておかなければ、と思つていた。

家具類はネットやカタログで注文することもできたが、日本とは規格が異なり、見当がつかない。株式会社安海やすうみで机やベッドを売つていた茅乃にすれば、なんとも不甲斐ない話だったが事実は事実。アメリカのインテリアショップにも興味津々だったし、これはやはり一度は実物を見なければ、

と茅乃はミッドタウンのインテリアショップに出かけることにした。

本当は瀬田と一緒に行きたかったが、仕事で疲れている彼を休みの日に家具探しに連れ回すのは申し訳ない。それよりは自分が先に下見を済ませておいて、目星をつけた物について彼の意見を聞いたほうが手っ取り早いと考えたのである。

「今日こそ迷子にならずに戻ってくるぞ！」

茅乃は玄関脇にある鏡の前で自分に向かって氣勢を上げると、さうさう颯爽と部屋をあとにした。

ニューヨークに来てから落ち込みがちだった茅乃が、珍しくいきようよう意気揚々と出かけたのには理由があった。

教師が機関銃のように話す内容が、おぼろげながら理解できるようになってきたのだ。さらに今日は休み時間にクラスメイトと普通に会話ができた。韓国から来たという男子学生のなんちゃってアメリカンジョークに引きつりながら笑うことができたのも、ジョークだと理解できたからこそだ。相手が何を言っているかさえわかれば、営業笑いなんてお手の物だった。

英語という巨大な壁をなんとか越えられそうな気がして、茅乃は浮き足立っていた。

今週の私はかなり頑張った。明日は土曜日で語学学校も休みなので、予習復習も明日やればいい。だから午後は遠出しても大丈夫。ずっと見たいと思っていたインテリアショップに今日こそ行ってみよう。

ということで、茅乃は本日の目的地をマンハッタン有数の繁華街であるミッドタウンに定めた。

ミッドタウンはコンドミニアムのあるアップパー・ウエスト・サイドからセントラル・パークに沿って南下した先にある。散歩がてら少し公園内を歩いてから地下鉄に乗りたいところだったが、あの広い公園内で迷子になる可能性もなきにしもあらず。念のために素直に地下鉄の駅を目指すことにした。

ミッドタウンにはS I Cの本社もあり、何度か瀬田に連れていってもらったことがあるので、最寄り駅の名前もはっきり記憶にある。その駅はミッドタウン・ノースの真ん中に位置し、コンドミニアムの最寄り駅からなら乗り換えなしで行くことができる。そのうえ、目指すインテリアショップも駅から目と鼻の先。駅の階段を上がった途端、目に入ってくるのだから迷いようもない。

彼に連れていってもらったときはS I Cの中しか見ることができなかったから、今度は会社の周りをちよっと散策して、インテリアと雑貨のお店を覗いてみることにしよう……

こうして茅乃は、地下鉄の駅を目指して鼻歌まじりで歩き出した。

ところが、やっぱりその日も思ったようにはいかなかった。

まずはじめに、入るべき改札口を間違えた。

アップパー・ウエスト・サイドからS I Cのあるミッドタウンに向かうには南に向かう地下鉄に乗らねばならない。この駅では向かう方向によって入る改札口が異なるというのに、茅乃はうっかり北に向かうための改札口をくぐってしまったのだ。

語学学校からの帰りはいつもその改札口から出てくるから、無意識のうちにそちらに向かったの

かもしれない。しかも茅乃がそれに気づいたのは、タイミングよく滑り込んできた電車に乗り込んでからである。

改札口をくぐって電車が来たらずかさずそれに乗る、というのはアメリカの地下鉄の場合おおむね正しい。昼間とはいえ、薄暗いホームに長時間立っているのは危ない土地柄なのである。

ただ、運の悪いことに茅乃が乗り込んだのは快速電車だった。ガイドブックを読みふけていた茅乃が、あれ？ おかしい、いつまで経っても会社の最寄りの駅名が表示されない、と思ったときには既に手遅れ。会社とは反対方向、マンハッタンの北部に運ばれてしまっていた。

次の間違いは、そのまま折り返さなかったことだ。

茅乃は、来てしまったのなら仕方がない、もしかしたらこのあたりにも素敵なお店があるかも……と軽く考えて、地上へと続く階段を上がった。

少し歩いた先に小さなアンティークショップを見つけたのが、さらに事態の悪化を招いた。他にも面白そうな店がありそうだとふらふら歩き回っているうちに、お馴染みの「ここはいつたいたこ？」状態に陥っていた。

こういうときは何か目立つ建物を捜せばいい、そうすれば現在位置がわかるはず、と頑張って歩いてみたが、周りほとんどん住宅街に変わっていき、目印になるような建物は一つも見当たらずなってしまった。

通りは複雑にカーブして入り組み、番地の付け方もばらばら、いざとなったらスマホで検索すればいいと思っていたのに、そのスマホ自体が電波微弱で使い物にならない。ごちゃごちゃと建てら

れている古いビルに電波が遮られているのかもしれない。

「碁盤の目を作るなら、街全部すみずみまできっちり作ってよ！ 中途半端なことするんじゃないー！」

なんて叫んでみても、事態は何一つ改善されなかった。しかも、今日に限って周りの人間は誰一人立ち止まってくれず、足早に通り過ぎていくばかりである。

地下鉄に乗りさえすれば少なくとも家には戻れるのだから、とにかく駅を探そう、とうろろしても、その駅自体が一つも見つからなかった。

ガイドブックによれば、およそ六百メートルの一つはあるはずなのに、いったいどうなっているのだろう。もしかしたら本格的にメインストリートから外れてしまったのだろうか……

一瞬、瀬田に電話をかけようかと考える。けれど、茅乃が迷子になったと知ったら、彼はまたあの申し訳なさそうな目になるだろう。それを思うと、何とか彼に知られる前に自力で帰宅したかった。

落ち着け私。聡司さんが家に戻ってくるのは午後七時すぎ。今はまだ三時半だから、いくらなんでもそれまでには帰り着けるに決まっている。きつと大丈夫……

ところが、それがちつとも大丈夫じゃなかったのである。

茅乃はついっつかり忘れていた。冬の北の町で、いかに早く日が暮れるかということ……

これはかなりまずい……かも……

そう思ったのは、通りの少し先にいる少年たちに目をやったときだった。

外遊びが減ったと言われている日本においても、いまだに路上で遊ぶ子どもたちはいる。

さすがに元気に鬼ごっことはいかないけれど、ちよつと集まってみんなでゲームに興じたり、サッカーのシュート練習ぐらいはしているだろう。

だが、今ここにいる子どもたちは、そんな日本の子どもとは明らかに表情が異なっていた。

どこまでも暗い、そして瞳に希望の色がない子どもたち。彼らはただじつと何かを待っている。通りに現れたのが見るからに呑気のんきそうな東洋人の女だと気づいて、がっかりしたような顔になったことでそれがわかる。

マンハッタンには非合法的な薬物や銃器の販売の末端を担になうことで、生活を維持する子どもがいる。ニューヨーク市の奮闘で、そういった街の暗部はかなり減ったとはいえ、今もまだそういう子どもたちがあちこちにしていると聞いた。

もしも目の前の子どもたちがそんな形で生活の糧かてを得ているとしたら、ここが安全な地区であるはずがない。そうではなかったとしても、荒んだ目を自分に向けてくる子どもたちは、茅乃にとつてそれだけで十分脅威だった。

だからといって、茅乃にはどうすることもできなかった。今までの人生でそんな経験をしたこと

がないのだから、対応できないのは当然である。

わかつていたのは、危険地域に足を踏み入れたらとにかく全身を緊張感で満たし、目的地に向けてまっしぐらに歩くこと、付け入る隙を決して見せないこと、だけである。

だから茅乃は精一杯胸を張って、ハイスピードで彼らの前を通り過ぎた。

迷い込んでいた裏通りを抜け、大通りに出られたときは本当にほっとした。だが次の瞬間、通りの向こうに沈みかけている太陽に気づいて絶望的な気分になる。

日没後の地下鉄には乗るな、特に女性は。

それはどんなガイドブックにでも書かれている注意事項だ。ましてや、ここが危険地域だと知ったばかり。これではもう駅を見つけた意味はない、探すべきはタクシー、つまりイエローキャブだった。

だがそのイエローキャブですらも、危険地域ではめつたなことでは拾えない。そのことを体感するのにかかった時間はわずか十分。どのタクシーも危険地域で拾うのは危険な客だとわかっているせいか、空車表示の車自体がない。たまに誰も乗っていない車が来たと思ったらそれは回送中だったり、予約済みだったり……とにかく、茅乃の前に止まってくれる車はいなかったのだ。

そうこうするうちに太陽はすっかり沈み、あたりは不気味な闇に包まれ始めた。

ふと見ると大通りに繋がる狭い路地の奥から、怪しげな男たちが茅乃の様子を窺うかがっていた。男たちが顔き合って合図を交わし、こちらに向かって足を踏み出す。

いくら茅乃が平和で呑気な日本育ちといっても、さすがに自分がターゲットになりかけていることぐらいはわかる。あまりにも危険な状況だった。

茅乃は、彼らから足早に遠ざかりながらポケットの中の携帯電話を探る。今ここで瀬田に連絡したところで、彼が見つけ出す前に自分はどうにかされてしまうかもしれない。そもそも仕事中、しかも会議中だったりしたら彼が電話に出てくれるとは限らない。それでもやはり助けを求める相手は瀬田しかいなかった。

背後から足音がどんどん近づいてくる。さらに前方からも何人かの男たちが……

茅乃は生まれて初めて、自分の身に迫る危険を実感した。

怖い……!!

背筋に冷たいものを感じたとき、空気を切り裂くようなブレーキ音を立てて、茅乃の目の前に一台の車が止まった。もつと質の悪い相手に攫われてしまうのかとパニックに陥りそうになった茅乃の耳に飛び込んできたのは、短い日本語だった。

「乗れ！」

ドアが開くと同時に引つ張り込まれ、閉まるか閉まらないかのうちに車が急発進した。反動でゆ

らりと揺れた身体に、聞き慣れた怒声が降ってくる。

「こんなとこで何やってんだ!!」

瀬田だった。

瀬田がいつも使っている運転手付きの車の後部座席。馴染み深いカーコロンの香りに包まれて、茅乃は安堵のあまり泣き出しそうになっていた。

いやきつと、涙の一つぐらいこぼしていたに違いない。だからこそ瀬田は、それ以上責めずに、じつと茅乃を抱きしめ、彼女が落ち着くのを待ってくれたのだろう。

もしかしたらそれは、彼自身の動揺を静めるために時間が必要だったからかもしれない。

「この街は安全な場所とそうでない場所が混在している。慣れていないお前が道を間違えたら簡単に危険地帯に入り込んでしまう。来たこともない、そこがどこか見当も付かないような場所に入り込んだときはうるうるせずにはまっすぐ引き返せ！ しかも何でこんな時間になるまで外にいるんだ！ 日没までには必ず帰宅しろって言っただろうが!!」

瀬田が茅乃の心情を慮って、精一杯感情を抑えようとしていることはわかった。それでも、どうにも堪えきれないのか、声はどんどん昂ぶっていく。

その声は、これまで聞いたことがないほど厳しくて、それでいて悲壮な響きを伴っていた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめ……ごめ……」

謝り続ける茅乃を、瀬田は骨を砕かんばかりの強さで抱きしめ、噛みつくように唇を重ねた。それは茅乃が、これは自分への罰だ、と思うほど痛みを伴う口づけで、いつものそれとは遠く隔たった行為だった。

瀬田もまた震えそうになる自分を必死で抑えていた。

茅乃を見つけた瞬間の、血が凍るような思いは容易には消せなかった。

彼女を挟み撃ちにするように前後から忍び寄る胡散臭そうな男たち。彼らと茅乃との距離は十数メートルもなかったのではないだろうか。

彼らの狙いが茅乃の命である可能性は低い。おそらく狙っているのは茅乃のバッグか身体そのものか……。いずれにしても距離を詰める必要がある。彼らが茅乃に近づいて手をかける前に救い出さなければならぬ。

その判断にかけた数秒の間にも、この街に慣れた運転手はアクセルを踏み込んでいた。

車は、茅乃の背を追っていた男たちをあつという間に追い越し、大音量のブレーキ音を響かせる。その音にひるんで男たちが足を止めた瞬間、瀬田がドアを開け茅乃を車内に引っ張り込んだのだ。

その後急発進した車を、男たちの怒号が追ってきた。遠くに聞こえた乾いた破裂音は銃声だったのかもしれない。だとすれば、そこでもまた、別の人間が別の危険に襲われているのだろう。

彼女を何一つ損なうことなく救い出したのは、奇跡としか思えなかった。

茅乃の無事を確認したとたん、安心する一方で彼女の無謀さに怒りがこみ上げてきた。

独立精神が旺盛なことは茅乃の美点ではあるが、彼女はこの街の危うさをまったくわかっていない。  
だが、それは瀬田にも責任があった。

これまでに茅乃は何度も迷子になっていた。それなのに瀬田は、道に迷ったまま危険な場所に入り込み、そのまま夜を迎えることの危険性を真剣に言い聞かせずにいた。そんな自分自身への怒りも相まって、口調が荒くなるのを止められなかったのだ。

このままでは、怖い思いをしたばかりで怯えきっている茅乃をさらに追い込みかねない。そのことに気づいて、瀬田はなんとか肩の力を抜いた。

「俺はお前を無理矢理この街に連れてきた。だがそれは、お互いに離れては生きていけないとわかっていたからだ。二人で一緒に生きていくためだ。お前を危険にさらすためじゃない。この街でだって安全に暮らす方法はちゃんとある。頼むから無茶なことはしないでくれ。お前に何かあったら俺は自分が許せない」

「わかりました……」

茅乃は瀬田の腕の中で震えが収まるのを待ちながら、彼が自分を救い出してくれたことにただただ感謝した。

「どうしてあそこにいるって……？」

運転手に送られて、無事にコンドミニアムに戻った茅乃がまず口にしたのはそんな疑問だった。彼があんな場所を、偶然通りかかるとは思えない。だとしたら、瀬田はどうやって茅乃の居場所を知ったのだろう……

「マーキスが連絡してきた」

その言葉を聞いて、茅乃は出かけにドアマンのマーキスと言葉を交わしたことを思い出した。五十代後半、ブルージェイの制服に身を包み、夜のような肌をした彼は、茅乃がこのコンドミアムに住み始めた当初から随分と親切にしてくれた。

語学学校から疲れ果てて戻るたびに『おかえり！ 今日頑張ってきたかい？』なんて声をかけて迎えてくれたし、近くにある美味しいデリやカフェも教えてくれた。

瀬田が、マーキスはともきれいな英語を話すから英会話レッスンの相手にはうってつけだ、と言うので、茅乃は積極的に彼と言葉を交わすようにしている。特に迷子になったときには、格好の話題だとばかりに、また迷っちゃった、などと話しかけていた。

そういえば、今日も出かけるときに行き先を訊ねられ、ミッドタウンに行くのだと答えた。

茅乃が迷子の常習犯だと知っているマーキスは、一人で出かけて大丈夫か？ と心配そうにしていた。「ちよつと家具の下見に行くだけ。すぐに戻ってくる」と説明したあと、英語でよどみなく答えられたことが嬉しくて、ただでさえ元氣一杯だった足取りがさらに軽くなったことを覚えてる。

ミセス瀬田が出かけてから随分経つ。ミッドタウンに行くけれどすぐに戻ってくると言っていたのにまだ帰らない。何もなければいいが、もうすぐ日も暮れるし、どこかでトラブルに巻き込まれているかもしれない。念のため確認してみたほうがいい。

マーキスからそう連絡を受け、瀬田は何度も茅乃の携帯に電話をした。けれど、ビルの隙間に入り込みでもしたのか、電話は全然つながらない。コンドミアムは留守番電話になったままだし、心配になった瀬田はどうとう仕事を切り上げて、茅乃を捜しに出たという。

「本当にごめんなさい。でも、よく見つかりましたね。いくらマンハッタンが狭いといってもそんなに簡単に見つかるなんてすごい。聡司さんってもしかしたらエスパー？」

「そんなわけがあるか。最悪の状況を考えて、一番危なそうな場所から捜し始めたんだ。それでも見つけたのは奇跡としか言いようがないな」

茅乃が降りた駅はコンドミアムから何駅も離れている。あてずっぽうに捜して見つかるわけがない。もしも瀬田が、迷い込んだら一番危険だと思われる地域から捜し始めなければ、このタイミングで茅乃を拾い上げるなどできなかつたはずだ。

「正しく南に向かう地下鉄に乗っていればちゃんとミッドタウンに着いたはずだし、お前が見たかったインテリアショップもおそらくあの店だろうと見当がついた。あそこなら駅の真ん前だし店を覗いたあと、ちゃんと家に戻れただろう。それができてないということは、うっかり北方面の地





「了解です」

「それから……こっちを見てくれ」

次に瀬田が取り出したのはマンハッタンの市街地図だった。そこにも地下鉄路線図と同じように次々と丸を入れていく。

「このこと、ここ。それからここ。絶対に行くなよ。それと、ここに行くときは気を付けろ」

「行くな、じゃなくて気をつけろなんですか？」

「ああ、ここはアジアや中国の食材なんかを売る店が集中してる。日本のものも売ってるからお前は行きたくなるに決まってる。ただ、とにかく入り組んで迷路みたいになってるんだ。下手すると半日さまようことになるから、現在位置をちゃんと確認しながら歩け」

「わかりました……でも……」

と、茅乃はあまりにもたくさんさんの赤丸がついた路線図と地図を戸惑いを浮かべた目で見つめた。

瀬田はそんな茅乃に期待に満ちた眼差しを向ける。

もしかしたら、昨日の一件で外に出ること自体が怖くなったのかもしれない。それならばむしろ好都合。瀬田の精神安定のためにも、しばらくは一人で外出してほしくなかった。

だが、茅乃はそんな殊勝なタイプではなかった。まさに「馬から落ちたら、またすぐに馬に乗れ」を地で行くタイプである。案の定、彼女は引きこもることよりも、安全に出かける方法を考え始めていた。

「でも、なんだ？」

「こんなに赤丸があつては覚えきれないし、しかも現在位置がわからなくなったらうっかり迷い込んでしまうこともあるかも……」

確かにそうだ、と瀬田も思う。

だいたいにおいて、危険な目に遭うのは、そこが危険だとわかって入り込む人間ではなく、そんな場所だと全然思わずに踏み込んでしまった人間のほうだ。そして彼らの大半は、危ないと言われている地名は知っていても、それがどこにあるのかわかっていない。地名だけいくら覚えてところで、それではまったく意味がない。

赤丸だらけの地図を眺め、茅乃はため息まじりに言う。

「あーなんかもう、センサーみたいな作れないんですかねえ……」

「センサー？」

「あらかじめ『ここが危ない』って登録してあって、そこに近づいたらピーピー鳴るとか、ぶるぶる震えるとか……。そういうのがあったら、迷子になっても危険な場所にだけは入り込まずに済むでしょ？」

ついでに、迷子にならないようにナビゲーションシステムも積んでくれればいいのに………と呟く。携帯のナビがあるだろう？ と答える瀬田に、茅乃はとんでもない、という顔で言った。

「あれって案外使えないんです。なんか融通がきかなくて」

「どういうことだ？」

「たとえば、三つぐらいの観光地を見たいと思うでしょ？ そんなときにA、B、Cって入力する

とその順番で回る方法は教えてくれるけど、どの順番で回ったら効率的か、までは考えてくれないんですよ」

「は？」

「AとCが隣り合っても、AからBへ行ってCに戻ってくるようなルートを出してくるんです。機械なんだからしょうがないけど、初めて行った土地で観光地をどう回るか、さっさと決められるような人はナビなんか頼らないと思いませんか？」

「いや、それはお前が知らないだけで機能としてはちゃんとあるはず……」

と瀬田が言ったとたん、茅乃の目が冷たく凍った。

「ちょっと待ってください。じゃあ聡司さん、なんで私が安海に入社した頃、あんなに毎日営業ルートを組ませたんですか!？」

「そこか……」

「そこに決まってるでしょ！ 必要もないことを延々と半年以上やらされたんですか、私は！」

だが瀬田は、あの頃と今とでは話が違うと一笑に付した。

「あの頃のナビに、そんな機能はなかった。だが、もしあったとしてもやっぱり俺は街を覚えさせるためにお前にルート作成を任せただろう。お前は名古屋育ちで学生時代は札幌だ。就職したての頃、東京のことなんて何も知らなかったじゃないか」

「え……あ……そう、だったんですか……」

「そうだったんだよ」

「でも私、もう今はちゃんとアプリもあるのに、名古屋でそれやっちゃいました」

それもさも得意げに……と茅乃は頭を抱える。

そんなナビがあるなら、それ自体を名古屋支社の営業マンたちに紹介すればいいだけのことだった。いやもしかししたら彼らのうち一人ぐらいはその機能のことを知っていて、茅乃のことを笑っていたのかも、と思うと赤面しそうになる。

「その話は聞いた。でもおかげで随分意識改革が進んで、営業成績も上がったって斎藤支社長が喜んでたぞ。お前がいなくなつたあとは、みんなして携帯ナビを使ってるらしい。便利な道具があつてもそれを使うことすら思いついてなかったんだから、お前は立派に起爆剤の役割を果たした」

「起爆剤って……」

なんだか納得のいかない話だったが、とりあえず現行のナビにそういう機能がついているのなら話は簡単だった。

「じゃあそのナビに、危険地域情報だけ入力しちゃえばいいんですよね。ナビを使う人間って迷子候補生に決まってるし！」

茅乃の言うとおりだ。

自分で地図が読める人間なら、一時的に現在位置を見失ってもすぐに見つけられる。自分が行きたいところをピックアップして効率よく回るルートだって組めそうなものである。自分でそれがで

きないからこそナビに頼るのだ。それでもなお彼らは迷子になってしまう。

地図を読むのが苦手なのに、ルートを組みのだけはやたら上手い茅乃は例外中の例外である。

だとしたら、危険地帯に近づいたことを知らせるアラームは、彼らのためにこそ必要な機能だった。

「S I C ってそういうことやらないんですか？」

何気なく茅乃が口にした疑問は、そのまま次の企画会議に持ち込まれることになった。

「携帯ナビに危険地域情報を組み込むこと自体は簡単です」

「事故や事件に合わせて情報の更新は可能か？」

「車の渋滞情報や、道路工事情報が入られるんですからできるはずですよ」

「情報源はどこから？」

「警察……と、そうだ、大使館経由のほうが簡単かも」

「電波の安定性は？」

「衛星回線が使えないかな？」

「コストがかかるだろう？」

「計算してみます」

S I C の中に危険地区情報を盛り込んだ携帯ナビ開発チームが編成されたのは、それからすぐのことだった。

「お前の方向音痴が意外なところで役に立った」

「それは何よりです……って私、そこで喜ぶべきですか？」

企画会議の様子を話す瀬田に、茅乃は複雑な思いを抱く。

会社がいい方向に動くのはうれしいけれど、そのきっかけが自分の迷子経験というのは、これから本社に出社する身としては随分痛い話である。

ただでさえ、専務の妻という鬱陶しい看板があるのに、そのうえ、ああ、あの迷子の……なんて言われてしまうのかと思うと素直に喜べるはずがなかった。

「つまらないことを気にするな。もういつそ開き直ればいい」

「開き直ればって、海外生活失敗対策チームでも作らせる気ですか？」

「お……それは面白いかも。初めて海外で暮らす日本人が困ることってけっこうあるだろう？ 俺や会社の連中は、海外に慣れきってるからもうそんなに失敗なんてしない。その点お前なら……」

「聡司さん……」

そういうのをサポートする商品とかサービスがあれば結構需要があるかもしれない、と瀬田はもうすっかり喜んでしまっただけ、ほかには何をやらかした？ と真顔で訊ねてくる。

何をやらかした……って、私だってそんなに失敗ばかり続けてるわけじゃないし、第一、なんで会社の人に恥をさらさなきゃならないんですか！ と叫んでみたところで瀬田は全然聞く耳を持たない。

入国してから今まで困ったことを全部思い出してみる！ とメモを片手に、目の前に陣取られてしまった。

「空港は？ 入国審査とか税関とか戸惑わなかったか？」

「平気ですよ。ああいうところははともとも観光客が利用することが前提だから、対応はしっかりしてるし、外国語が堪能なスタッフだってたくさんいます。困ってる人に差し出す手は何本でも……」

「でも市内だけでも空港は四つもあるぞ。空港によって違うものもあるだろうし」「いくつあっても同じです。到着するのがどの空港かわからないミステリーツアーじゃあるまいし、行き先がわかっているんですから、前もって調べることでだってできます。ガイドブックも山ほど出るじゃないですか」

「そうか……つまらんな」

つまらん……ってことはないでしょう、と茅乃はまじまじと瀬田の顔に見入ってしまふ。

同時に、本当にこの人は仕事が好きなんだな……と感心もした。

常にアンテナを張り巡らせ、ビジネスチャンスを無駄にしないようにしている。だからこそ、株式会社安海でもあんなに出世したし、SICでだって七光りを浴びまくったお飾り扱いを受けずに済んでいるのだろう。

ただ、それと引き換えに、彼は常に極度の緊張を強いられている。何かをやってくれそうな男として、周りを牽引し、成果を出すことを期待されているのだ。

三月に入って本格的に業務を再開した瀬田は、自宅に戻ると疲れを隠せない様子でいる。

休暇中にたまった仕事の量が半端じゃないことは確かだが、その疲労具合は株式会社安海で専務と営業部長を兼務していたときとは比べものにならない。それは、会社の規模と次期社長として背負わねばならぬもの大きさの違いをまざまざと感じさせた。

彼がそんな様子をさらけ出すのは自分の前だけだとわかってはいるだけに、茅乃の心配はさらに深くなる。

それでも、新しい企画を考え出し、実際に取り組み始めたときの瀬田は、日頃の疲れた様子はいったいどこに行ったのだ、と思わせるほどに生き生きと輝き始める。様々なプレッシャーに負けることなく、瀬田がその輝きを放っていることに茅乃は安心する。

自分を惹きつけた瀬田の魅力は健在だ。自分も彼に負けないように頑張らなければならない。茅乃は、嬉しそうな夫を見守りながら、そんな決意を新たにす。

彼が生き生きと仕事をするために私の失敗が役に立つのであれば、多少、恥をかくぐらいなんでもない。ましてやそれが私のように、右も左もわからないままに海外生活に突入することになった人間の役に立つのであれば言うことはない。

茅乃は、もしもまた気がついたことがあったら、忘れず瀬田に報告すると約束した。

瀬田は満足そうに頷く。それでも彼は「危ないことだけはするなよ」と念を押すことを忘れなかった。

## 第二章 専務室の人々

四月がやってきた。

茅乃は久しぶりにビジネススーツに身を包み、出勤用のトートバッグを肩にかける。

長い休暇はどうとう終わりを告げ、今日から茅乃はS I C本社専務室勤務となる。職務内容はあらかた把握しているし、日本にいるときに既に実践済み。瀬田とともに働くことにも慣れすぎるほど慣れている。それでも、S I Cという巨大企業、しかも本社への初出勤となれば緊張せずにはいられなかった。

瀬田と同じ車に乗って出かけたところまでは昨日と同じだが、向かう先は語学学校ではない。

マンハッタン一のビジネス街であるミッドタウン。そのど真ん中に本社ビルはある。威圧感たっぷりの高層ビルに車が横付けされると、茅乃は、やっぱりやめた、と言ってしまいたくなった。

もし隣に座っていた瀬田が、にやにやと笑いながら「怖じ気づいたのか？」なんて言わなければ、逃げ帰っていたかもしれない。

無理なら無理で仕方がない、なんて言いながらも、瀬田の見下したような表情は明らかに茅乃の負けん気を煽っていた。それがわかっていても、茅乃はいつだって、そんな瀬田の挑発をやりやすくてできないのだ。

「たとえ大和<sup>やまと</sup>ペンペン草<sup>ペンペン草</sup>としても、私にだって意地があります。こんなところで逃げ帰るわけにはいきません！」

「その意気だ。では奥様お手をどうぞ」

瀬田は豪快に笑うと、芝居めいた仕草で茅乃の手を取り、彼女が車から降りるのを助けた。

正面玄関から入ってエレベーターに乗るまでの間、茅乃は周囲の視線を痛いほどに感じた。

「あれがジュニアのワイフか……なんか見かけは普通だな」

「でも、意外と気が強そうな顔してるわよ」

「あの創業記念パーティの立役者<sup>たてやくしゃ</sup>なんだろう？ 結構やり手らしいじゃないか」

そんな囁きが耳に忍び込んでくる。日本語ならともかく、英語で交わされるものの意味も理解していることに気づいて、茅乃は喜ぶべきなのか嘆くべきなのかわからなくなる。

日常会話が聞き取れるレベルに<sup>たどり</sup>着けたことは嬉しい。でも、噂話の内容がおぼろげながらもわかってしまうのは、ある意味悲劇だ。

ひそひそと囁かれる声に茅乃は、英語の勉強をもっとおざなりにしておけばよかったと思っってしまった。

日本であれば、四月一日は年度はじめ。新入社員の受け入れやら、年度はじめの社員集会やらあれこれ忙しい日であるが、ここはニューヨーク。会計年度は十月始まりの九月締めになっている。だから、四月一日の今日も、昨日と何ら変わりなく始まる。

嗜好きな社員たちはそれぞれの部署で業務を開始し、茅乃も瀬田に連れられて専務室に向かった。

「おはようございます」

「おはよう」

瀬田と貝谷の間で交わされた挨拶を聞いて、茅乃はやっと緊張の糸を解いた。

瀬田はこれまですれ違った社員たちのほとんどと英語で話していたが、専務室の中のやりとりはどうやら日本語らしい。もしかしたらそれは単なる新入りへの配慮かもしれないが、この場所に馴染むまでの間だけでも、頭の中で英語と日本語の置き換えをやらずにすむのはありがたかった。

瀬田をはじめとする本社社員たちは、いちいち英語を日本語に訳す必要などなく、英語は英語のまま理解しているのだろうけれど、とてもじゃないけれど茅乃はそんなレベルに達していない。だから、当面日本語で仕事ができるのは大助かりだった。

専務室には机が三つあった。

一つは瀬田が使う両袖が付いた大きな机。摩天楼を見下ろせる大きな窓を背にして置かれ、椅子も重役用のハイバックタイプのものだ。あとの二つは壁際に並べられた片袖付きの事務机で、一つは貝谷の席らしく、パソコンは既に起動され、何枚かの書類が机上に置かれている。

朝の挨拶をすませたあと、メールをざっと確認した貝谷は、連絡事項があるからと総務課に出かけていった。

茅乃の席は貝谷の隣で、机の上にはパソコンだけが置かれている。茅乃は早速その席に座って引き出しを開けてみた。

正面の引き出しにはメモ用紙や封筒、便せんといった紙の類。右袖の一番上には電卓やボールペンなどの筆記用具。一番下の引き出しは、通勤用の鞆をしまえるように空っぽになっていた。

茅乃は机の引き出しを開けたり閉めたりして中を確認し、最後に一番下の引き出しに鞆をしまった。その様子をじっと見守っていた瀬田が訊ねる。

「それで支障ないか？」

「まったくありません。というか……よく覚えてましたね」

引き出しの中にある事務用品の配置は、株式会社安海で茅乃が働いていた頃の事務机とそっくり同じになっていた。ボールペンまで茅乃が使っていたのと同じ銘柄である。

そのことで茅乃は、この机が用意されたのは昨日今日のことではないと気づかされる。

株式会社安海時代にお気に入りだったボールペンは、茅乃が安海を辞めてしばらくした頃にモデルチェンジされた。それまでの物よりもわずかに軸が細くなり、デザインとしてはとてもおしゃれになったけれど、茅乃は今ひとつ馴染めなくてとても残念に思っていた。

だが、今、引き出しの中にあるボールペンはモデルチェンジ前のタイプである。SIC、しかもアメリカにある本社が日本製の古いボールペンを大量に抱えているはずがない。おそらく瀬田が入社する前に揃えさせたものだろう。

瀬田自身は、ボールペンにこだわりなど持っていなかったはずだから、茅乃のためにわざわざそ

の銘柄を指定したに決まっている。

パソコンにしても、あの当時の最新機種、しかも茅乃が使い慣れたメーカーのものだった。試しに立ち上げてみると、設定までも茅乃が使っていたものと同じように整えられている。そして、空っぽのデータファイルは、今までこのパソコンを使った人間が誰もいないことを示していた。その机にあるすべてのものが、誰に使われることもなく、ただじつと茅乃が来る日を待っていたのである。

SICなんてとんでもない、と逃亡し、将来この机を使うかどうか定かではなかった自分のために、瀬田はここまで気を遣って準備してくれていたのかと思うと、茅乃は申し訳なきに言葉を失う。彼はこの部屋で、誰も座っていないこの机を見ながら、いったい何を思っていたのだろう。

もういい、好きにしろ、過去のことなど切り捨てだ、と思った瞬間はなかったのだろうか……

瀬田はタイムラグのことなどおくびにも出さず、一年半遅れでようやく机の主となった茅乃にちよつと自慢げに言う。

「お前の机の中ぐらい覚えているさ。何年も見てたんだから」

「そういえば、しよつちゆう人の机からボールペンやら電卓やら持っていきましたよね」

「お前はいつも『なんで自分のを使わないんですか』って怒ってたな」

「そりゃそうでしょ。同じものが自分の机にもあるのになんでわざわざ……」

と、言いかけて茅乃は言葉を切った。瀬田の目が茶目つけたつぷりに輝いている。

「そう、わざわざだったんだ。俺って結構かわいいだろう？」

瀬田は、茅乃から借りる必要もないはずの文房具を、頻繁に持っていた。

席を外して戻ったときなど三回に一回は、何かが机から消えていた。ボールペンだったり、使い慣れた電卓だったり、なくなるものは日によって違ったけれど、それらほたいい瀬田の机に移動していた。そのたびに茅乃は瀬田のところに行って「私もそれ使えます。早く返してください！」と手を突き出さねばならなかった。

それがすべて、茅乃にちよつかいをかけるために瀬田が仕組んでいたのだとしたら、確かに「かわいい」と言っているのかもしれない。しかもそれは、小学生男子に匹敵するかわいさで、頭を小脇に抱え込んでぐりぐり撫でてやりたくなるほどだ。

でも、それを自己申告する男というのはやっぱかわいくなんかない。むしろ小癩だ。

そう思った茅乃は、言い返さずにいられた。

「自分で言わないでください！」

「誰も言ってくれないから自分で言うしかないじゃないか」

「誰も言わないのは、誰もそう思っていないからです。聡司さんが『かわいい』とかありえませんか」

「あいかわらず失礼な奴だな」

「お互い様です」

そして二人は顔を見合わせて同時に吹き出した。

瀬田は茅乃をからかい、茅乃は上司を上司とも思わない口調で反撃する。このやりとりこそが、瀬田と瀬田係の日常だ。二人は、ようやく取り戻した日常が嬉しくてならなかった。

「ああ、懐かしいな、この感じ。安海の営業部に戻ったみたいだ」

「確かに。でも本当に戻っちゃったら困りますけど」

「困るのか？ あれはあれで楽しかったと思うぞ」

「楽しいですけど、それとこれとは別問題です。聡司さんのお父さんも困るし、うちの父だって困ります」

「お前のお父さんは別に困らないだろう。かわいい娘を海の向こうにやらずにすむし」

「あーそういう感覚はないですね、うちのお父さんには。困るというよりも、現状渡しの返品なしだって言ったじゃないか！ 約束が違う！ って怒ると思います」

「返さない。だからお父さんの心配は無用だ」

「太平洋越えて来ちゃったし、返品するのも大変ですものね」

「お前、まだそんな……」

何とも情けない表情になった瀬田に、茅乃は、そんな顔しないでください、と笑う。

「あの頃に戻っちゃったら一番困るのは私です。聡司さんが私にここにおいてほしいってことも、私がかここにいたってことも、ちゃんとわかってます。だから、もしも今、安海の営業部に戻れるとしても戻ったりしません。第一、あそこにした聡司さんは、香かおりさんのお婿さん候補だったんですから、そんな状態に戻るなんてまっぴらごめんです」

「それを聞いて安心した」

「ということで、仕事しましょう。私、何からやればいいんですか？」

「ああ、じゃあ、そうだな……」

瀬田はすぐに分厚いファイルをよくし、中身を整理するように指示した。

ファイルにはS I Cの主だった部門の月次活動報告書が時系列に沿って綴とじられていたが、瀬田はそれを部門ごとに整理してくれという。おそらく彼は、そんな整理などするまでもなく、頭の中に全てを入れてるに違いない。きっと、茅乃が分類するためにその報告書を読み、昨年のS I Cの動きを把握することを期待しての指示だろう。

S I C本社での初仕事として実に適当かつ有意義。そんな仕事をさらりと振ってくれた瀬田に改めて感謝しながら、茅乃のS I C本社での一日目が始まった。

十

「茅乃、この間の件だが」

「ああ、あれ。本気だったんですね」

「俺はいつだって本気だ」

「どうだか。で？」

「売り方が難しい」

「ターゲットは街に慣れていない人、ですかね」



「どこに網を張る?」

「そういう人が必ず通る場所に広告出して、あと販売所?」

「駅とか空港か」

「出国側の旅行代理店も。ついでにそれぞれのサイトにバナー広告もいいと思います」

「レンタルタイプも考えるべきだな」

「むしろ主力はそっちかもしれません。期限付きのアプリでもいいでしょうし」

「あとは?」

「元から住んでいても、判断力や防衛力が低い人たち」

「子どもと老人?」

「私みたいにか弱そうな女性も入れてください」

「ほざけ」

「失礼な。このたおやかな大和撫子やまとなでしこを捕まえて」

「ぺんぺん草なんだろう? お前は」

「なんて無駄な記憶力! そういういろいろな情報はさっさとデリートしてください」

「心配しなくても容量は余ってる」

「他のことに使ってください」

「他のことにも使うさ。じゃあ、あれはその方向で」

「根回しは着実に。強権発動でごり押ししないでくださいね」

「俺は紳士だ」

「聞いて呆れます」

瀬田と茅乃はそれぞれが別々の作業をしながら言葉を交わしている。

手も止めず、お互いの顔すら見ないままにぼんぼんと進んでいく会話に、貝谷は驚きを隠せなかった。

この二人が長年一緒に仕事をしてきたことは知っている。瀬田がSICに入社するにあたっての第一条件が、相馬茅乃を専務室付きの社員として受け入れることだったということも聞いていた。

はじめは自分の女を手元に置きたいだけではないのか、と期待すらしていなかった彼女の能力は、昨年夏の創業記念パーティで周知のものとなった。

仙台から名古屋への急な会場変更で、何の心構えもなかったにもかかわらず、一ヶ月足らずで貝谷が舌を巻くほどの企画書と実施要項が届いた。

小さな不備一つ出さずにパーティを終了させ、参加した社員たちからはこれまでのどのパーティよりも配慮が行き届いており、楽しかったと高い評価を得ている。

たかがパーティといっても、あれだけ参加者が多いものをつつがなく終わらせ、なおかつ満足感を与えるためには、かなりのマネジメント能力が必要とされる。

相馬茅乃はそのパーティを担当したことで、瀬田聡司の身びいきではなく、彼女自身の能力がSICで働くに値するものと証明したのだ。

貝谷から見て、茅乃と瀬田の仕事の進め方はとてもよく似ていた。入社したばかりの彼女を、瀬田が一から仕込んだそうだから当然である。だから、瀬田と茅乃が抜群のチームワークを発揮するだろうというところくらいわかっていた。そもそもあの瀬田聡司がどうしても望み、一度はSICへの入社を拒否されながらも諦められなかった相手である。さぞや一緒に働きやすい関係なのだろうと予測はしていたのだ。

それでもなお、ここまでとは思わなかった。

二人は、固有名詞や、問題がどこにあると考えているか、などの基本的な情報交換をすつ飛ばして会話を展開している。

携帯ナビという言葉一つ使うことなく話題に入り、そのまま最小限の言葉数で当たり前みたいに打ち合わせができるのは、お互いの言葉の使い方や思考傾向を熟知しているからだろう。

二人のやりとりに、貝谷は、ツーカーというのは突き詰めればここまで行くのだと実感する。

そのうえ二人の会話には、一般社員が専務相手に、あるいは男が女に言っではいけないことが満載だ。よほどの信頼関係がなければモラハラだ、セクハラだと大騒ぎになるような内容にもかかわらず、二人は会話を楽しんでいる。

しかもそんなやりとりをしながら、二人は恐るべき速度で仕事をこなしていく。

これが本来の瀬田聡司の姿だ。彼は、懐刀を奪回したことでようやくその能力の全てを発揮できるようにになった。目の前の二人の姿に、貝谷はそう思い知らされた。

入社当時の瀬田聡司は、もしかしたら暖機運転をしていたのかもしれない。

社長の息子である瀬田が、七光りと言われることを恐れたのは当然だった。

瀬田聡司は入社とともに任せられた膨大な量の仕事をそつなくこなし、瀬田雄介の後継者としての資格を全社に示した。部下が失敗をしても表だって怒鳴りつけたりしないし、七光りを匂わせるような非難を聞いても聞き流す。会議の場で発言したことを、「君はまだSICのことがわかっていない」と否定されても、反論せず従うことが多かった。

端的に言うならば、入社当時の瀬田聡司は暖簾に腕押し状態。瀬田雄介の息子は有能かもしれないが覇気に欠ける、このままではSICの将来は不安だとさえ噂されていた。

ただ、日常的に彼を間近に見ている貝谷には、そんな瀬田聡司の姿がどこか虚像のように思えなかった。

残業が長引いた夜、瀬田は作業の合間に専務室の大きな窓からマンハッタンの夜景を見下ろしていた。きつと本人は貝谷に見られているとは気づいていなかったに違いない。けれど貝谷の席からは、ガラスに映った彼の表情がはつきりと見えていた。

ガラスの中の彼は、普段の穏やかそうな様子とは打って変わって厳しい表情をしていた。

鋭い目つきで街を睨み、貝谷が話しかける声も耳に入っていないようだ。そんな姿に、瀬田聡司という人は周りが思っているほど穏やかでも覇気がないわけでもないのかもしれない、と思わずにいられなかった。その推測の正しさが証明されたのは、彼が茅乃との関係を回復したあのことだった。

瀬田聡司は、創業記念パーティを終えて日本から戻るなり、これまでのS I Cの体制を根本から見直し、改善すべき項目を怒涛どとうのように並べ立てた。彼は懐刀なつかいを取り戻したことで得た高揚感をそのまま仕事にぶつけた、あるいは、暖機運転を終えてそろそろ自分本来のやり方を示す時期と考えたのかもしれない。

けれど、根回しをせずに事実だけを突きつけるような彼のやり方は、S I Cを困惑させた。優秀なのは認めるが、人の上に立つ人間としてはもう少し協調性が必要なのではないか。自分のみならず周囲にまであの暴走に近いスピードを求めて、S I Cを空中分解させてしまうのではないか。

貝谷の目から見ても明らかにエネルギー過剰。五の力で十分にこなせる仕事に十の力を注いで、それでもなお、消費しきれないエネルギーが彼の周りで放電され火花を散らし、周囲を不安にさせていた。

そんな中、相馬茅乃が渡米した。

彼女との初顔合わせは印象的だった。

待ちに待った懐刀がニューヨークに到着したとたん、瀬田は彼女を会社に連れてきた。

彼女の仕事は四月一日からすると決めたのは瀬田自身だったのに、専務室にいる彼女を見て我慢できなくなったのか、「やっぱりもう少し練り上げてもいいか？」と貝谷に訊きいてきた。

貝谷は冗談まじりに、受け入れ準備など昨年から整っていますよ、と答えようとしたのだが、それより先に茅乃本人が異議を申し立てた。

「自分の発言を二転三転させないでください。まだありません信用がそれだけで大暴落です」

貝谷は目を見張った。陰口ならともかく、専務であり社長の息子でもある瀬田に面と向かってこんな口をきく人間を見たことがなかった。しかも、怒りを爆発させるかと思った瀬田が、

「まだありもしない信用は落ちない。というより、ありもしないと言おうな。鋭意努力中だ」と、あっさり返したことにさらに仰天し、思わず茅乃の顔をまじまじと見つめてしまった。

茅乃は顔を凝視されていることなど気にもせず、貝谷に訊いた。

「この人、本当に努力しています？ なんとなく空回りしてませんか？」

思わず貝谷は苦笑した。

空回り、というのは、それまでの瀬田の状態を表す絶妙な表現だった。周囲を気遣わず走り続ける暴走列車。これが瀬田聡司のやり方なのだと思いますが、貝谷は彼と周囲との間に摩擦が生まれることを心配し続けていた。

「あたらすといえども遠からず、って感じですね」

貝谷の言葉を聞いて、茅乃は我が意を得たりという顔になり、再び瀬田聡司を攻撃し始めた。

「やっぱり。何でそんなにへたっぴーなんですか？ お客さんとならあんなに上手くやれるくせに、どうして自分の会社の人相手だと傍若無人ぼうじやくふじんになるのかなあ。まさか、頭下げるのはお金をもらうためだけだ、とか変な思い込みしてるんじゃないでしょうね？」

暖機運転の間、ずっと堪え忍んでいた瀬田の姿を見てきた貝谷は、それはちよつと言いすぎだ、と思った。だが瀬田は平然と言葉を返した。

「何が悪い、実際そのとおりだろう」

「聡司さん、その考え方はあまりにも貧しいです。貧しすぎて情けなくなりませす。『実るほど頭を垂れる稲穂かな』って諺があるじゃないですか。ちよつと田んぼにでも行って稲穂を見てきたほうがいいです、つて、田んぼはないか、アメリカには」

「アメリカにだって田んぼぐらいある。カリフォルニア米は極上だ。だが、そんな観察は必要ない」

「いやいや、頭の下げ方は稲穂が一番。古来、そう言われております。ぜひとも見習うべきです」

「本当に口が減らない奴だな」

「そりゃあもう、すっかり仕込まれましたから。頭下げるのは自分の徳を積むためだとも思えばいいじゃないですか。下げるべきときは下げて、周りともちゃんと仲良くしてください。さもないと、あつというまにクーデターが起きますよ」

「わかった、わかった」

瀬田は、降参とばかりに、顔の横に両手を上げる。茅乃は瀬田の芝居めいた仕草に一瞬顔をしかめ、そのあと貝谷に問いかけた。

「この人つて、基本的にもものすごくこの国向きかもしれないけど、日本人としてちよつとどうかと思いませんか？」

はいとは言えず、かといって、いいえと言うのも嘘になる。曖昧に笑つてごまかそうとする貝谷に、彼女はさもわかっているといった顔で微笑んだ。

その微笑みは『瀬田聡司取り扱い熟練者』の余裕を感じさせる。貝谷にとつては頼もしい限りだった。

十

茅乃の渡米が確実となったことで、瀬田聡司の肩から力が抜け、暴走列車にS I Cを破壊されるのではないかと恐れていた社員たちは安堵した。瀬田聡司は大丈夫だ。父親ほどの器ではないにしても、S I Cの後継者として遜色はない、と……

だが、茅乃がS I C専務室で仕事を始めて二週間も過ぎると、瀬田聡司の能力を見極めたつもりになっていた社員たちは、懐刀を手元に置いた彼の底力を見せつけられることになった。

茅乃の巧みな舵取りで、瀬田聡司は時に立ち止まり、時に振り返り、周囲の様子を確認しながら会社全体のことを考えるようになった。社員たちも徐々に彼への信頼を高め、一部の重役たちは、ゆくゆくは父親を超えるかもしれないと噂するほどだ。

二人が丁々発止とやり合う姿が社内のおちこちで見られ、周囲の話題を呼んでいる。瀬田係にやり込められる専務が見たいと、ウオッチングに精を出すものまで現れる始末である。瀬田のそんな姿は、暴走列車化していた彼の印象を和らげ、社員との距離を狭めるのに大いに役立っている。